

明日見る夕陽

所属ゼミ…小説ゼミ2

学籍番号…52553018

氏名…山下 正昭

片側1車線の曲がりくねった山道を1台のコンパクトカーが走っていく。道路はヘアピッカーブが続きひたすら上り続けている。ハンドルを握るのは作業服を着た二十代半ばの男性。毎朝、一時間ほどかけて同じ道を上り、夜になると逆方向に下っていく。たまに反対方向から来る車とすれ違うが、どの車もかなりのスピードを出しているように見える。毎日同じように山の中に向かって走り、山の上で仕事をして帰るとい生活が一月ほど続いている。この生活は、まだ一年以上続くだろう。三月までは福岡市中心部にあるオフィスビルに通勤して、若者の笑い声や談笑する姿を見ながら歩いてきた。四月からは、それとは真逆の生活になった。車は山を切り開いた中に作られた未舗装道路に入っていくと、その先に作られたプレハブの現場事務所の前で止まった。男は車を降りると、ひと気のない現場事務所を鍵を開けて中に入った。ほどなくすると、外から車のエンジン音が聞こえてきて、数人の談笑する声が出て、現場事務所に入ってくるのと同時に活気が宿ってきた。一日の始まりである。

現場事務所がある場所は、福岡県の南部に位置する八女市矢部村という山あいの地区で、一番近くにある集落は竹原地区という。そこに数軒の家が建ち、細々と生活を営んでいる。その集落の先には竹原峠があり、その峠を越えると大分県日田市となる。山の中の畠境に位置する場所なのである。竹原地区は、普通に読めば「たけはら」だが、地区では「たかわら」と呼ばれている。周辺は山林でおおわれているが、一部切り開かれた土地には棚田が広がり地方特有の風景が広がっている。のどかな風景であるが、道路は狭く生活するには不慣れた土地である。竹原峠に至っては、国道であるにも関わらず、道路幅が四メートルほどの狭小幅員が続く。そこを伐木された材木を積んだ大型トラックが行き来し、すれ違う場所が数数か所設けられてはいるものの立ち往生する車もある。標高が高いことから、冬は積雪や凍結で通行止めになることもあり、この場所で生活する住民は陸の孤島だといふものさえている。近年は温暖化の影響もあり夏には異常気象で大雨になることもあることから、住民の安全のために新たな道路が必要だという地域の声が高まり、新たなバイパスとして竹原峠道路が建設されることとなった。

新田隼人は、大学を卒業後、大手ゼネコンに就職し、最初の一年は九州支社で研修を受けながらスポット的に建設現場の手伝いに入っていた。建設現場は主に道路の現場が多く、新田が行った作業は施工管理の資料整理であった。建設現場では、品質や出来形に関する計測データを細かく管理し、出来上がる構造物との整合をチェックしなければならぬ。現場での作業は建設機械により大規模な掘削や構造物の建造を一気に行っていくので、機械を操縦するオペレーターと作業員が数人いる程度で、工事規模の割には現場にいる人は少ない。汚い作業が多いと思われることが多いが、自分で重いものを持つこともなく、毎日データと現場を見比べて整合不整合を見極めることが中心となっている。ある意味頭脳労働だと言ってもいい。そして、この四月からは福岡県が発注したトンネル工事を会社が受注し、初めて現場担当として工期全体を通して従事することとなったのである。

現場に入って最初の数日は緊張していたが、時間経過とともにその雰囲気には慣れ、逆につまらなさを感じるようになっていた。都会にある大学で学び、就職して最初の勤務も繁華

街が近い街中であつて遊ぶ場所に困ることはなかった。それが一変して限界集落と言つてもいいような地方で、若者の姿を見ることもなく、高齢者ばかりが静かに暮らしている場所で働くことになり面白いことを探すのに苦労するという状況である。住まいは、会社が借りている山の麓の集落にあるアパートだが、そこも店が少なく夜は人の往来はおろか車の行き来も激減するという場所であつた。悶々とした日常がずっと続くことに、まだ若い男の心は虚しさを通り越して悔しさにも似た感情が芽生えようとしていた。IT企業に就職した大学の同級生は、もつと楽しく毎日を過ごしているだろう。以前は飲みにかかないかと毎日のように連絡が来ていたが、隼人が地方勤務になつた途端に連絡すらなくなつた。きつと別の仲間を誘つて、女性グループと街に繰り出して飲んでいるに違いない。そんな思いを巡らせていたところ、大きな声が事務所内に響いた。

「おい、新田。着工前測量の結果をすぐに持ってきてくれ。」
聞こえてきたのは、現場事務所長の声だつた。

「新田、早く、着工前測量の結果だよ。」
少し怒気を含んだような言い方で繰り返され、隼人は我に返つてファイルを持っていった。隼人がファイルを渡すと、すでに初老といった面持ちの現場事務所長は測量結果を手書きでメモした野帳と交互に目をやり、途端に渋い表情になつた。

「すぐに現場に行くぞ。」
そう言うと、険しい表情のまま工事用ヘルメットを手にして隼人を引き連れるかのように現場事務所を出て行つた。

隼人は、何が起つているのか理解ができなかつた。すぐに確認用に設置された基準点と、掘削が始まつたばかりのトンネル坑口に設置された計画高を示すターゲットの高さを計測するように指示された。すると事前に測つていたはずの高さと、実際のターゲットの高さが五センチメートルほど合わなかつた。その結果は、何度測つても変わることがなく、計画の高さよりターゲットが低い位置に來ている。隼人は、自分が行つた着工前測量が間違つていたのではないかという不安に襲われ始めた。

「新田、これはどういうことだろうか。」
事務所長から問われても、隼人は返す言葉がなかつた。

「今は五センチメートルのずれでも、この先何メートルも掘り進んでいけばその差は何十センチメートルにもなるし、数メートルになる恐れだつてある。それは分かるよな。」
そう言われると返す言葉もなかつた。実際に行つた作業を思い返すと、何度もチェックして、誤差は三ミリメートルしかなかつたはずである。それなのに、どうして今日はこんなにも差が出ているのだろうか。基準点の高さを取り間違えたのだろうか。

「現場事務所に戻つて、もう一度測量成果をチェックします。」
慌てて隼人は現場事務所に戻つていった。

「新田さん、どうされたのですか。お手伝いしましょうか。」
慌てふためいている隼人の姿を見た女性事務員の千絵は、すかさず声をかけてきた。彼女は、現場事務所の事務補助を行つてもらうために採用したアルバイトで、矢部村に住んでいる。隼人よりも二歳ほど年下で、彼に密かに彼に恋心を寄せていた。一度、隼人に対して彼女はいるのかと聞いたことがあつた。それに対して、今はいないと素っ気なく答えたことがあつ

た。元来、自分のことを多く語りたくない性分で、適当にはぐらかすことがある。だが、千絵はその言葉を真に受けて、それ以来、隼人にさりげないアプローチをかけるようになったのだ。矢部村に住み、いつかはここを出て都会に住みたいと思っている。この機会を逃してはならないという思いが、どことなく表れているのだ。実のところ、慕われることに対して悪くは思っていない。それは彼女がいる身であってでもだ。そこが自分のずるいところかもしれない、そう思うところもあった。

「ありがとうございます。これは僕しかできないので、大丈夫です。気持ちだけ受け取っておきます。」

そう言うと、自分の席についてパソコンに向き合って数字のチェックを始めた。測量したときに手書きメモした野帳も見返しながら、座標や標高の入力ミスがないか一つ一つ確認していった。何度数字を見ても入力したデータに間違いを見つけるとはできない。ぴったりと几帳面なほどに正確な数字が並んでいる。頭を抱えながらどうしたものかを考えていると、現場事務所の階段を重い足取りで上がってくる足音が聞こえてきた。その刹那、引き戸が勢いよく開けられる音がした。

現場事務所はプレハブながら二階建てになっている。一階は、休憩室や会議室として利用し、二階が事務室となっているので、人が入ってくるときにはその足音で気が付くのだ。

「おい、工事責任者はおるか。」

怒鳴り声にも聞こえる大きな声だった。あいにく現場事務所長や先輩職員は皆、現場に出ている。事務室にいるのは、隼人と千絵の若い二人だけだった。慌てて千絵は、大声を上げた老人の元へ行った。

「どげんせらしたとですか。」

「どげんもこげんもなかった。すぐに工事ば止めませんか。」

声の主は、大きな声のままどっしりと身構えた感じで、今にも襲いかかるのではないかという獣のような雰囲気醸し出していた。見た目には、六〇代後半といったところだろうか。白髪で肌は浅黒く、顔には長年外で仕事をしてきたことを表すような深い皺が刻まれている。千絵は、立ち尽くしたまま怯えた表情で小刻みに身体を震わしていた。隼人は、慌てて席を立つとその老人の元へ向かった。

「お前が工事の責任者か。」

息を荒げたような言い方で老人は隼人の顔を見ている。

「いえ、上司は不在にしています。私は担当者です。何があったのでしょうか。」

背中から一気に汗が噴き出る感覚と共に、なんとかこの場を切り抜けないといけないという思いで表情を硬くして向き合った。

「誰の許可ばもらって工事ばしよるとか。毎日、うるさかろうが。静かな山の中で自然破壊ばすんなじゃん。」

工事をやることは、事前に役所が地元説明会で話していたはずである。この老人もそのことは知っていたのではないだろうか。なのに今更何を言い出しているのか。隼人は、老人の言っていることが理解できずにいた。

「そういわれましても・・・。」

良い言葉が見つからずに口ごもってしまい、重い空気が立ち込めていく感覚に襲われた。

「お前じゃ話にならない。また来るけん、上のもんによーと言うとけ。」

そう言う老人は、戸を閉じることなくその場を後にした。

「新田さん。」

千絵は、泣きそうな表情で声を掛けていた。

「驚きましたね。一体何なのでしょね。」

きわめて平静を保ちながら、吹き出しそうなアドレナリンを必死に沈めながら声を出していた。現場事務所には二人しかないが、どんよりとした空気が流れ、早く職員のうち誰かが戻ってきてくれないかという不安な気持ちのまま時間がゆっくりと流れていった。

トンネル工事は住民の安全で安心な暮らしのためにも必要なもので、皆が望んでいるものだとばかり思っていた。切望され、一日でも早く工事を完成させることが地域のためになると思ってた現場に入ってきたはずなのに、あんな言われようをするとは夢にも思っていなかった。それはとても衝撃的で、仕事に対するこれまでの思いを一気に打ち砕かれたかのようだった。

朝から測量結果の再確認を指示され、まだ確認が終わる前に地元住民から強烈な苦情を受け、すっかり意気消沈してしまった。一体、何のために仕事をしているのだろうか。一人の青年の自問自答が始まった。親元を離れて早く自立したいと、生まれ育った鹿児島を後にして関東の大学に行き、工学部で土木工学の勉強をした。三年生になったときに土質を専攻し、関東の地質を調べる研究室に入った。教授はとても面白い人で、土は舐めるとその味でいつの時代のものか分かっていくって生徒を笑わせていた。

研究室には男子だけでなく女子生徒も数人いて、みんな仲が良かった。教授と研究室の間で月に一度は飲みに行った。何回目かの飲み会の時、その中の女子生徒と急接近し、二人は付き合うこととなった。男っぽい性格ながら、料理が得意で、毎週土曜日の夜は彼女の部屋で料理を食べながら酒を酌み交わしていた。話が尽きることなく、日曜の朝までお互いの思いを語ったり、ゲームをしたりしながら過ごして日曜はそのまま夕方まで寝ているといったことも多かった。このまま将来はこの人と一緒に生活することになるのかもしれないとおぼろげに考えていたが、就活で彼女は地元市の役所の採用試験を受けて合格した。隼人は、ゼネコン志望で企業訪問を重ねて今の会社に採用が決まった。彼女の地元は青森県八戸市だった。大学を卒業したら、彼女は実家へと戻ってしまい、大手ゼネコンに就職した隼人は東北支店を希望したが、配属になったのは故郷に近い九州支店となった。二人の距離は途方もなく遠くなってしまい、彼女のほうから別れを切り出されたのだった。

それからしばらくはそのことを引きずりながら生活していたが、半年ほど経った頃に高校の同級生と福岡市内で偶然再会し、ご飯を食べに行ったり、飲みに行ったりするようになった。その数か月後には相手から、ずっと好きだったと告白され、自然と付き合う流れになった。隼人は、好きという感情よりも誰かと一緒にいると寂しさが紛れて良いという思いのほうが強かったのかもしれない。高校時代の同級生は、料理は苦手だが、おいしい店を見つける臭覚は鋭かった。毎週のように、どこそこに美味しいお店がオープンしたという情報を持ってきては、二人のスケジュールを調整して予約し、月に一回のペースで外食を楽しんでいた。酔うとやたらと甘えてきて憎めない存在となっていたが、心の中では大学時代の彼女の姿が時折フラッシュバックすることがあった。

このままの人生で良いのだろうか。四月からは地方に住み、仕事中心の生活となった。そのせいもあって、今の彼女とは会う機会も減ってしまった。毎日、彼女からメールは届き、

日曜には向こうから部屋に訪れて来てくれるが、現場に近い土地にいるせいとか、仕事のことがいとも頭の中にあつた。初めての現場勤務で、きちんと実績を作りたいという思いも強かつたのかもしれない。それなのに、測量をミスしてしまったかもしれないという思いと、激しい苦情により、地方生活の悔しさが一気に倍増してしまった。こんな日を迎えるために、大学時代の彼女と別れたのだろうかという思いまでも湧き上がってきている。

「新田、測量データの確認は出来たか。」

現場事務所の重い空気を切り裂くように、事務所長の声が聞こえてきた。先ほどまで現場にいた上司は、何かに気が付いたように息を荒げて戻ってきたのだつた。

「何度見返しても、測量データにおかしなところはないのですが。」

「やはり、そうか。」

そう言うと、ほかの職員も連れ立って現場に行くように促した。現場では何人もの職員が光波測距儀で距離を計測し、レベルで高さを確認している。胸騒ぎがする中、事務所長が口を開いた。

「山が、動いている。」

二

まだ工事は始まったばかりだ。なのに山が動くとはどういうことなのか。疑問に思いながら、隼人は工事現場よりも高い標高の山の中にいた。仕事に対するモヤモヤとした思いがまだ頭の中にある。何のために今の仕事をしているのか、このままこの仕事を続けていいのかという思いは払拭されていない。だが、このまま仕事を投げ出すわけにはいかなかった。事務所長にトンネル工事現場の周辺の山を歩いて調査してこいと言われ、安全靴にヘルメット、安全チョッキを着て、手には下草を切るための鎌、首からはカメラをぶら下げるといって立ちで急な斜面を登っていた。数日前に降った雨のせいか地面は湿っており、歩いてみると足を取られて滑りそうになる。そこを慎重に歩みを進めた。曲がって立つ木立の枝に手を差し伸べて、不安定になった身体を支えることも度々あった。山には特に変わった様子はない、そう思ったところに石を積み重ねて何かの目印としたような場所にたどり着いた。それはうっすらと苔が生えていて、ずいぶんと前に人の手によって重ねられたものだと想像できた。それはなんだかとても気味が悪く、何かの信号を発しているかのようにも感じられた。

山には神様が宿っていると昔から言われている。トンネル工事に着工する前には、矢部村にある神社から神主を呼んで、安全祈願祭を行い工事の無事を祈願した。トンネル工事を行う際には、恒例行事でもある。山に向けて祈祷し、お神酒を捧げて山の神に敬意を表すのである。土木工事は、自然を作り出した神を敬い、神のイカヅチに触れぬように進められる。決して自然を軽視してはいけないのである。自然を軽視するものは必ずその報いを受けるのだと、入社したての頃に先輩職員から聞いたことがあった。このトンネル工事は、山の神の逆鱗に触れたのかもしれない。もし祟りだったらどうしようと思うと、その場所にいるのが怖くなってきた。写真を撮るのも怖いので、おおむねの場所を持参してきた地形図に印だけしてその場を去ることとした。事務所長は、山の神の祟りを恐れて隼人に調査を依頼したのだろうか。技術が進化した現代において、そんなオカルト的なことを考えると、工事現

場とはなんと前近代的な世界なのだろうかという思いが沸き起こってきた。この仕事を続けることが自分のためになるのだろうか。土木業界に入って間もない若者は、ますます自分の未来が不安になってきていた。

そんな思いの中、湿った葉が落ちた斜面で足を滑らせないよう、慎重に一步ずつ前に進めていたところ、一瞬、足下が不安定になりそのまま尻餅をつく形で転んでしまった。したたかに打ち付けた尾てい骨に手を持って行くと、目を閉じたまま天を仰ぎ、思わず声が出た。

「いたたた・・・」

うっかりと転んでしまった。もし怪我をしたら労働災害となってしまう、会社に迷惑をかける。仕事に対する疑問と裏腹に一方では、会社に置かれた自分の身を感じてしまう。そうした矛盾を感じながら、身体をさすりつつゆっくりと起き上がった。痛みはあるものの、どうやら大きな怪我はしていないようだった。服の汚れを手で払いながら体制を立て直して頭を上げると、どこからか声が聞こえてきた。

「大丈夫ですか。派手にこけなさって。」

隼人は声の方向を探りながら廻りを見回すと、斜面の十メートルほど下方に高齢の男性が立っていた。

「あ、はい、ちよっとお尻を打ちましたが大丈夫です。」

その男性は、なおも心配そうに新田の方を見ていた。高齢ではあるものの、背筋はしっかりと伸びていて、しっかりとトレッキングの装いをしている。

「この辺は、うっかり足を踏み入れるとそこから抜け出せなくなってしまいますから、注意しなされたほうが良いですよ。」

なんとも意味ありげなことを言うものである。

「この山は、何か不気味な言い伝えとかがあるでしょうか。」

未だに臀部をさすりながら、隼人は、なんとなく気になっっていること聞いた。男性は、不思議な顔をして若者の顔を見て戸惑ったような表情でいた。

「なんで、そんなことを聞くのですか。」

慌てて隼人は、手を振って前言撤回しなければならぬと思ひ言葉を探した。

「いえいえ、何でもないので。最近良くないことが続いていて、もしかしたらこの山に近づいたせいかと思っただけで、つい変なことを聞いてしまいました。」

不憫そうな顔をしてその男性は口を開いた。

「この山は、外の山に比べると優しいですけど、時に牙をむいたように人に襲いかかることもあるのですよ。山ってそんなものです。山を舐めたらいかんですよ。」

当たり前の話を聞かされているような気もした。自然は人間が作り出したものではなく、ある意味、神が作り出したものである。人の手に負えるものではないはずである。科学技術は進歩し、人間の力で都市を造り出したものの、それと引き換えに自然を改変してきた。人々の暮らしの場を作り出すことはとても大切なことであるが、自然は壮大で、何かのきっかけで急転直下に襲いかかるのだろうか。

「すいません、変なことを聞いてしまいました。」

そう言うと、隼人は足下に気をつけながら男性の横を通って斜面を降りていった。

「地面をしつかり踏みしめながら、ゆっくり降りていった方が良いでしょう。」

汚れた作業服の背面を見ながら、男性は声を掛けていた。

「ありがとうございます。」

振り返り頭を下げると、男性は心配そうな顔で見送っていた。しかし、こんな急な山を、高齢者が登ってきたのは不思議な光景だった。二十代の若者でも辛いくらいなのに、息が上がる感じも無くとも落ち着いたたはずまいだった。ふと振り返って斜面の上方に目をやると、もうそこには男性はいなかった。いたいあの人は、何だったのか。実在したのか、幻影か。もしかすると山の神の化身かもしれない。そんな科学的根拠も無い妄想にとらわれながら、ゆっくりと山を下りていった。

現場事務所に着くと、事務所長はパソコンの画面を見ながら眉をひそめて小さな声でブツブツと何かをつぶやいていた。

「お疲れ様です。今戻りました。」

隼人の声を聞いて、女性事務員の千絵が笑みを浮かべながら入口まで来て出迎えてくれた。

「おかえりなさい、お疲れ様です。」

隼人は、疲れた表情を見せながらも、千絵が手渡してくれた冷たいおしぼりを受け取るとホツとして自然に笑みがこぼれていた。

「ありがとうございます。冷たくて気持ちいいですね。」

おしぼりを額に当てて、まるで自分の頭を冷やすかのような仕草のまま、少しのあいだ目を閉じた。

「新田、山はどうだったか。気になるところはなかったか。」

目を開けると事務所長がいつの間にか目の前に来ていた。

「僕が見たところでは、気づいたところはなかったです。」

「そうか、それじゃあ明日からも毎日、山に登って見てきてくれ。」

その言葉を聞いて隼人は、驚いた表情で事務所長の顔をじつと見ていた。あの気味が悪い山に再び登ることが躊躇われるのに、毎日とはどういうことなのか。内心、事務所長のことを恨めしく思った。

「わかりました。」

嫌で仕方がないが、上司の命令に逆らうわけにはいかない。そう思うと現場事務所に設置されている自分の席に着いて、ため息をついていた。

「新田さん、コーヒーどうぞ。」

千絵がコーヒーを入れたカップを机の上に置いてくれた。コーヒーからは、ローズマリーの香りがしていた。コーヒーは、隼人のこだわりで、ローズマリーをインフュードしたコーヒー豆を取り寄せて自分専用として置いている。昔から、ローズマリーの香りには癒やされていた。家の庭に、母親が植えたローズマリーがあつて、家で料理する際には、葉をハサミで切ってきて、母親がスパイス代わりに使っていた。その時の香りが鼻の奥にこびりついたようになり、今でもその匂いを嗅ぐと落ち着くのである。

我に返りながら、少し冷静になろうと自分に言い聞かせていた。千絵は、隼人によくしてくれている。申し訳なさもあるが今は甘えてもいいのかもしれない。けれど、過度の期待を持たせてはいけない。この仕事が終われば、自分はまた別の現場に行くか、支店勤務になるだろう。それまでは、少しでも心が癒される時を過ごしたい、そう思った。ふと、立ち上が

り事務所長の前に行くくと、隼人は山でのことを話すこととした。

「実は、さつき山に登って変なものを見つけたのです。石を積み上げたようなもので、人工的に作られた祠のようにも思えました。場所は、このあたりです。」

そう言って、地図に書き込んだ印を見せた。事務所長は地図にちらっと眼を向けたが、特に言葉はなかった。

「山には神が宿っています。もし、その神を怒らせてしまっているのなら厄介なことになる気がします。この場所に神主さんを呼んで、お祓いしてもらったほうがいいのじゃないでしょうか。」

「現場経費は無駄にしたくないが、分かった、それは新田に任せる。だが、山の調査は毎日続けてもらいたい。よろしく。」

事務所長の表情に変化はなかった。時間はいつの間にか十七時を回っていて、終業の時間となっていた。現場から、複数の職員が現場事務所に戻ってきて、事務所内は一気に賑やかになっていった。その後、一人二人と現場事務所を後にし、現場事務所は静かなただの箱となり、周囲は闇に包まれた。

翌日、またいつものように現場事務所には人が集まり、作業開始のベルと共に人々は現場に出て行った。トンネルの掘削作業は、昨日より一時中断している。事務所長の判断だった。発注者との協議もあるし、原因究明が先だということだろう。現場事務所で、関係者に電話を掛けながら調整をしている姿を隼人は横目で見ながら、地図を前に、今日ほどのルートから山に登るかを考えていた。すると、外の階段を上ってくる重い足音が聞こえてきた。

「おい、責任者はおるか。」

昨日もやって来た地元の老人だった。千絵が入口まで行こうとしたが、隼人はその先に出て老人の元へ向かった。

「おはようございます。どうされましたか。」

平静を装いながら、表情をほんの少し緩ませて対応することとした。昨日のことは、測量の件もあり、事務所長へは伝えそびれていた。まず、相手の話を自分が聞くしかない、そう思いつながら老人の顔をみていた。

「お前、工事を止めたとか。昨日の昼から機械の動く音がせんことになったけん、確かめに来たったい。」

「工事を止めたわけじゃありません。いろいろと確認することがあって一時的に機械が動いていないだけです。」

思いつく言葉を並べて、早くこの老人を追い返したかった。

「なんか、こら。工事を止めましたって、はっきり言わんか、こら。」

語気を荒げながら、老人の顔は少し紅潮していた。

「工事を止めることはないです。」

思わず言葉が出てしまった。新田は、背中から大量の汗が噴き出してくるのを感じ、この言葉が、老人の心に火をつけてしまわないかという焦りにより急に息苦しくなってきた。

「なんか、こら。なんか、その言い方は。」

老人は激昂し、その声は現場事務所内に響き渡った。すると、現場事務所長が慌てて老人の前に向かってきた。

「すいません、栗原さん。うちの新人が失礼なことを言ってしまったみたいで。」

隼人は、事務所長の後ろに下がると、驚きにも似た表情で二人の姿をみていた。事務所長は、この老人のことを知っていた。以前にも何かやり取りをしていた可能性がある。それならば、早く昨日のことを伝えておくべきだった。後悔の念を感じながら、今後どうなっていくのだろうかという不安が心の中を占めていた。

「栗原さんが心配されていることは、分かります。私どももきちんと調査して対応していきますので、その結果が出るまで少しお待ちいただけませんか？」

老人は、その言葉を聞いてもおなほ、表情を崩すことなく威圧的な面持ちで立っている。気持ちを静めようとしているのか、言葉を探しているのか。一瞬、時が止まったような感覚にも襲われた。

「俺は、工事を認めた訳じゃないけん。工事を止めるまで、毎日でも来るけんな。」

そう言うのと踵を返し、現場事務所を出て行った。老人が去ると、事務所内は一気に安堵の空気に包まれた。

「すいません、所長。報告していなかったのですが、あの方は昨日も来られていました。」

ここは詫びるしかないと思い、頭を下げていた。

「そうか、昨日も来ていたのか。わかった、気にするな。」

そう言うのと、現場を取り仕切るリーダーの風格を感じさせながら、事務所長は自席に戻っていった。そしてまた、電話機を手に持ち、関係者に連絡を始めていた。隼人は、先ほどの老人の「毎日来る」という言葉を思い返し、たまったものじゃないと苦悶の表情をしながら窓の外を眺めていた。

毎日、日付が変わるたびにストレスが積み重なっていくような気がする。この工事が終わるまで、精神状態を維持することができのだろうか。工事も、順調だとは言いがたい状態になった。老人の素性を聞きたいが、事務所長は忙しそうにしている、とても聞く雰囲気ではない。このまま、ここを逃げ出したい思いに駆られながらふと顔を横に向けると、千絵が心配そうな表情で隼人のことを見ていた。

「コーヒー飲みますか。」

隼人の心を察しているかのような言葉だった。

「はい、お願いしていいですか。」

少し元気を取り戻したような感覚になり、自分の席に戻った。差し出されたコーヒーの香りを吸い込むようにして心を落ち着かせながら、神社の電話番号を調べ、神主へ連絡を入れてお祓いをお願いをすることにした。電話を掛けると、神主が直接電話に出たのだが、都合が悪くと言われ、断られてしまった。安全祈願祭の時にもお願いした神社だったので、快く引き受けてもらえると思っていたのだが、意外にもその真逆だったのだ。隼人の心に不吉な予感が漂った。こんなことがあるのだろうか、想定と違う方向に流れが変わっていく感覚にも似ていた。

人は、先を見据えて行動していくものである。その先は、良いことにつながると信じて動いているはずなのに、それが裏目にばかり出れば行動することが怖くなってしまふ。まるで、迷宮の入り口に立たされたみたいだった。はたして、この工事は無事に完成するのだろうか。先が見えない状態のまま、自分はやっていけるのだろうか。崇りに遭い、最悪の場合、人命が失われるかもしれない。そんなことを考えると、栗原という老人の「工事を止

める」という言葉が、別の意味を持つてくるような気がして、たまらなく不安になってくるのであった。地域の人は、山の崇りを信じているのではないか。それにより、不幸になることを知っているのではないか。山の神との向き合い方を知るほうが、ことの解決には一番の近道なのではないかと、発想を膨らますまでになっていた。だが、そのことを言葉にして人に話すのはまだ早い気がする。この地区の成り立ちなど、しつかりと調べて根拠を持って話さないと、呆れた顔で聞き流されて終わりだし、ただの変人扱いされてしまうだけである。隼人は、コーヒーを啜りながら、すっかり瞑想に入っていた。

「おい、新田。昼イチで大学の先生が来てくれることになったから、一緒に山に登ってくれ。」隼人の瞑想は、その瞬間に打ち消されてしまった。

「大学の先生ですか。分かりました。」

現実世界に引き戻されると、自分の立ち位置がわからなくなり右往左往している役者の気分で、現場のリーダーの顔を見返していた。

三

昼を過ぎたころ、現場事務所の階段を上がってくる足音がした。事務所長が、麓の駅まで車で迎えに行くと言っていたので、今到着したのだろう。

「どうぞ、お入りください。」

そう言つて事務所長が案内すると、その後ろには高齢の男性が立っていた。隼人は、思わず「あっ」と声をあげてしまった。昨日、山の中で会ったその人であった。

「身体は、もう痛くないですか。」

その男性は、隼人が転んで尻もちをついたことを少し皮肉めいて言っているような気もしたが、顔を見るとそんなことをいうタイプとは到底思えず、本当に心配して言ってくれているようであった。事務所長は、新田と男性の顔を交互に見ながら驚いたような顔で二人の間に立っていた。

「先生、新田のことをご存じですか。」

「いえいえ、昨日、たまたま山登りをしているときにバツタリと会っただけですよ。」

隼人は、山で人と遭遇したことは当然のごとく事務所長には話していなかった。

「昨日は、ご心配ありがとうございました。わたしは、この現場の担当者の新田隼人と申し上げます。」

少し焦りながら、名刺を手渡すと男性も名刺を差し出した。名刺には「九州大学 名誉教授 永瀬英輔」と書いてあった。

「この現場で働いていたのですね。」

永瀬はそう言くと、笑顔を見せて嬉しそうにしていた。

「先生、昨日分かったのですが、どうも山が動いているようなのです。まだ、五センチメートルほどなのですが、設計で示された土質データでは、特に軟弱な層はないのでぜひ先生のご見解を伺いたくしてお呼びした次第です。」

事務所長が簡単に説明すると、永瀬は全てを理解したように頷いて口を開いた。

「これは、山の神のいたずらですね。新田さん、今から一緒に山に登りましょう。」

「先生、冗談はよしてくださいよ。」

事務所長は、困った表情で永瀬のほうを見ていた。隼人は、すでに現場に出る準備は出来ていたので、永瀬の後に続いて現場事務所を出て行った。

道すがら、隼人は永瀬に聞きたいことが沢山あると思いつきながら、何から聞けばいいのか考えを巡らせていた。そして、山に入る前にまず聞いたのは、永瀬と事務所長の関係だった。「先生、先生は事務所長とどういうお知り合いなのでしょうか。」

「ああ、今村君は、わたしの教え子ですよ。わたしは大学で地質を教えていますね、今では引退して何かあれば大学に呼ばれたり、役所に呼ばれたり、企業に呼ばれたりしながら助言をしています。今村君は、現場で困ったことがあると、よくわたしに連絡してくるのでですよ。」

なるほど、そういうことなのかと隼人は思った。朝からずっと電話していたうちの一人は、この大学名誉教授で、助言をもらうために現場に来てもらえないかとお願いしていたのだ。ほどなく歩くと、道路から外れたところに「猿駝山 登山道入り口」と書かれた看板が立っていた。高齢の教授は、まったく息が上がることなくそこまで割と速い速度で歩いている。隼人は、着いていくのがやっとなんか感じだった。トンネル工事は、山を越える峠道のバイパスとして建設していて、その峠の名前から「竹原峠トンネル」という名前が付けられることとなっている。だが、実際の山の名称は別にあり、猿駝山と呼ばれている。この場所は、福岡県と大分県の県境で九州山地の北部に当たるが、いくつもの山が連なる連山となっており、地図をよく見ればいくつもの山の名前を確認することができる。隼人は、工事現場に入ったときは、現場の周りの狭いエリアだけにしか目がいかなかったが、周囲の山の調査を指示されたときに改めて地図を見てそのことに気が付いた。

「じゃあ今から、登山道に入りますよ。途中から険しくなるから、足下には十分気を付けてください。」

すつかり歩きなれた道のように足早に永瀬は登り始めた。やはり、不思議な人だと隼人は思いつきながら、後を必死についていくしかなかった。歳はかなりいっているはずである。しかし、その足取りはとても軽く、どこに足を置けば安定するかを最初から分かっているかのよう前に進んでいる。これでは、その他の聞きたいことを聞きながら歩くといったことは出来やしない。曲がった木が左右に立ち、その幹を握りながら体を支持しないと登れない場所もあった。岩が露出し、崩れそうになっている場所もある。年老いた教授の歩く順路をなぞるようにあるいているが、もうそれだけで精いっぱいだった。

「もうちょっと行くと平場がありますから、そこで少し休憩しましょう。」

そう言うと、少しだけ歩きの速度が遅くなった。隼人は、ホッとしてそのあとに続いた。

「さあ、ここで少し休みましょう。」

永瀬は、そこにあつた岩に腰を下ろした。

「先生、とても足が軽いですね。ついていくのも、やっとなりました。」

老教授は笑いながら、隼人の顔を見ていた。

「それはもう、この山には何百回も登っていますから。」

隼人は、教授の顔を何度か見返すほど驚いていた。

「何百ですか。」

それだけ登っていれば、どこに何があるかもわかるのだろう。足を踏み外すこともないのか

もしれない。

「けど、季節や時間帯によって、山は変わります。雨の後は特に危険です。わたしでも怖い思いをすることもあります。山は、まさに生きているのです。」

教授らしい、重みのある言葉であった。

「若いあなたに、こんなことを言うと、説教じみた老人だと思われるかもしれませんが、人生も山登りと同じだと思います。」

教授は、背負ってきたリュックから小さな水筒を取り出すと、蓋を取り外し、それをカップにして中のコーヒートを注いだ。まだ、湯気が出ている。

「毎日、同じようでありながら実は毎日違う風景を見ている。数人が、同じ場所にいて同じ風景を見ていたとしても、その視点の先には別のものがあって、感じることや考えることは全く違っているのですよ。だけど、それに気が付く人はあまりいない。」

コーヒートをゆつくりと啜りながら言葉をつづけた。

「山に登ると、そのことがよくわかるのです。わたしは、大学で地質を教えるしてきましたが、当然のごとく研究のためにいつも山に登っていました。助教授時代には、よく教授に怒られたりして、むしゃくしゃしたら研究と称して山に登ってストレス解消をしたものです。」

永瀬の言うことは、今の隼人の心に一気に浸み込んできた。

「僕も大学時代の研究室は土質で、授業でたまに山に行くこともありましたが、そんなことは考えたことがなかったです。」

「ほう、わたしと同じ研究をしていたのですね。頼もしいですね。もう少し上ると見晴らしがよくなりますから、頑張ってまた歩きましょうか。」

教授は、コーヒートを飲み干すとゆつくりと立ち上がり、軽い足取りで歩みを進めた。隼人は、休憩が短い気もしたが、教授の言葉を聞いた後だと少し心が軽くなり、先ほどまでよりも身軽になった気がしていた。この山の先には、何があるのだろうか。隼人は、山の崇りがあるのだと思っている。しかし、老教授は、まったくそんな気配は感じさせずに登っていく。現場事務所に来たときは、「山の神のいたずら」とも言っていたが、あの言葉は何だったのだろうか。教授の後を追いつながら少し目を横にやると、その場所は昨日、隼人が滑って転んだ場所のあたりだった。そして、その少し上には石を積んだ祠のようなものがある場所だ。隼人は、その場所を気にしながらも、足を滑らさないように足下をしっかりと見ながら登って行った。教授の足も、若干遅くなった気がする。やはり、険しい場所だということを理解して登っているのだろうか。

「もう少ししたら、眺めがよくなりますよ。」

するとほどなくして、急に視界が開ける場所にやってきた。木々が開かれて、遠くのほうまで見ることが出来る。視線の先には、別の山が見えるが、とてもいい景色であった。

「いい景色でしょう。わたしは、この景色を見るためにこの山に登ってくるのですよ。ここから見る夕陽が最高で、毎回、それを見ながら生きていて良かったと思うのです。」

永瀬は、指をさしながら山の間に吸い込まれるように沈んでいく夕陽の情景を熱のこもった弁で話していた

「確かに、良い景色ですね。けど、さすがに毎日登るのはきつい気がします。」

苦笑いしながら、隼人は汗を拭いていた。

「あの、先ほど登ってきた途中に、僕が昨日滑って転んだ場所があったのですけど、その少

し上に行ったところに石を積み上げた祠のようなものがあつたのですが、ご存じですか。」
隼人は、やつと聞きたいことのもう一つについて、聞くことができた。

「ああ、あれですね。知っていますよ。」

永瀬の答えは、さらっとしたものだつた。

「僕は、あの石がとめて不気味で、何か歴史的に悪いことがあつた場所なのではないかとも思っています。山の神と関係があるのかはわかりませんが、あの場所がトンネル工事現場の上にあるような気がして、もしかしたら工事に悪影響を与えているのではないかと思つているのです。」

永瀬は、不思議そうな顔をして隼人を見ていた。面白いことを言う若者だなと言わんばかりの表情であつた。

「確かに、山の神はわたしも居ると思つています。ですが、崇りというのは、科学的根拠がないと思います。歴史は、そういつたものを恐れて今に伝える文化もありますが、それは人間が勝手に作り出した妄想であつて真実ではないです。」

教授が言うことは、もつともであつた。科学で証明できないことを説明するのは難しい。科学で説明できない場合に、神話などの伝説に例えてみたり、人間の感覚の中で作り出された寓話を事実として認知させて処理されてきたのだろう。逆に言えば、人間のDNAに刻まれた都合のいい解釈があるからこそ、人類はこれまで生きながらえてきたのだ。こまかい事象のひとつひとつを科学で証明せずとも、それを気にすることなく日常に取り込みながら生活することができるのである。民俗文化の中にある宗教は最たるものであろう。

「今から、石が積まれた場所に行きましよう。」

隼人が思いを巡らせていることを知ってか知らずか、教授は険しい斜面を何事もないかのように歩き出していた。科学という言葉を味方につけた若者は、崇りなどという非科学的な恐怖心はすでに消え、たのもししい背中に従うように後ろをついていくのだった。足を進めると、地面が少し柔らかくなり水分を帯びたように感じられた。それまでと同じ步調で歩けば、昨日のようにすぐに転んでしまふだろう。永瀬の足も、その一步一步がゆつくりと慎重であつた。

「あの石積みでしょう。」

教授が指さす方向に目をやると、人の手で積み上げたような石があつた。隼人が昨日、見つけた石そのものだ。近づきながら、永瀬は周囲をくまなく見渡していた。

「この石は、人為的に積まれたものです。どうしてこんな場所に積まれているのか分かりません。」

永瀬は、若者に質問を投げかけた。神がかり的な答えを望んでいないのは分かるが、正解を言い当てることは至難の業であつた。隼人が答えらずに黙つてしていると、笑顔で語り始めた。

「この石は、目印なのです。」

「え、目印ですか。」

あつげにとられた若者の表情を確認すると、永瀬は話を続けた。

「この辺りは、地面が湿っているでしょう。これは、湧水が出ていたからです。地盤には、いくつもの細かい切れ目があつて地層が変化しているところがあります。それらは断層といえます。学校で学んできたならば、ご存じだとは思いますが、その切れ目に従つて水みちができることがあり、地表まで溢れ出ることもあります。山に降つた雨は、土の中を通り濾

過されながら奇麗な水になります。それが地下水となるのですが、それが地表まで出てくればミネラルを含んだ美味しい水になります。ここまで話せば、この石がどうしてここにあるか分るでしょう。」

「湧水が出ている場所を示す目印ということですか。」

若者の答えを聞くと、永瀬の顔がさらに柔らかくなり、喜びともいえる表情になっていた。「その通りです。かなり前に、地元の人がここに湧水があることを見つけて、分かりやすいように目印として石を積んだのでしよう。周りをよく見てください。何かがあるのに気が付かないですか。」

隼人は、目を凝らしながら周囲を見渡した。すると、黒い小さなパイプが地面から出ていて、それが斜面を這うように山の下へと続いている。しかも、パイプは一本ではなく複数本あり、何か所からか出ているのであった。この場所は、地元住民の水源地帯となっているのだろう。「この地区で暮らす人は、ここから水を引いて生活水として利用しているようですね。さらに、この土質は保水力も高いので、植物の植生にも適しています。よくみれば、この周辺は植林もたくさんあるのがわかるでしょう。」

永瀬の言う通りであった。この地区は、林業が盛んにおこなわれていると工事現場に入る前に聞かされたことがある。木や水に対する思い入れは、かなり強いはずだ。外から来た人は、それを考える余地などなかった。ただの自然として捉えてしまうが、地域の人にとってこの土地は生活の糧であり、基盤である。

「わたしは、夕陽が見たくて、何度もこの山に登ってきています。ですが、地域の人の生活を脅かすようなことはしたくないので、ルールを守って登山道を使っています。この山の登山道は、ほかの山に比べると険しくて、どこが道になっているのかも分かりにくいので、初めての方は迷って踏み荒らしてはいけないところにも入っているのかもしれないですね。」

昨日、新田さんを見かけたときも、道に迷ったのだろうと心配してみていたのです。「隼人は、昨日転んだ場所を目で追っていた。その場所のあたりを注目してみると、地表にパイプがあるのが分かった。きつと、あのパイプの表面に足を乗せてしまい、その拍子に摩擦が失われ一気に転んでしまったのだろう。隼人は、思考を巡らせ、この土地とトンネル工事現場との関係性を考えていた。そして、工事を止めるまで何度も訪れると言っていた栗原のことも思い出していた。」

「先生、この湧水は、今現在も変わらない水量で出ているのでしょうか。」
隼人の唐突な質問に、教授は少したじろいだ表情を見せた。何度も同じ山に登っていれば、その少しの変化も気づくところである。若者のその鋭い質問は、確かに的を射ていた。何かの要因で、水の量は減っていると考えられる。永瀬がいつも登ってくる登山道は基本的には乾いた部分が多いが、いつも一部だけ湿っている場所があった。しかし、昨日も今日もその湿っている場所が乾いていた。それは、山の上部から流れてくる表面水が無くなっていることを意味していたのである。

「現状を見ると、山の水が減ってきていることは否めないですね。」

教授のその言葉が、隼人の心に大きく突き刺さった。

「先生、ありがとうございます。」

そうして、二人は山を下りて行った。

現場事務所に戻ると、そこには事務所長の今村と事務員の千絵の二人がいるだけで、ほかには誰もいなかった。事務所長の今村は、パソコンを見ながら険しい表情のまま何かを考えているようだった。

「ただいま戻りました。」

隼人は、名誉教授を先導するように現場事務所に入ってきた。

「先生、お疲れさまでした。」

今村は、慌てたように入口の扉まで駆けつけて、かつての恩師に頭を下げていた。永瀬は、ここにこ笑いながら疲れてなんていないよというように、右手を左右に振って見せていた。

「新田さんが、山の中で気付いたことがあるみたいですよ。」

隼人の顔を見ながら、永瀬は発言を促すような手の動きをして見せた。

「どうぞ中へお入りください。」

今村の横に立っていた千絵は、入口に立っている二人を早く座らせようと室内に案内した。事務所執務室内には、小さな会議テーブルがあり、三人がテーブルを囲む形で椅子に腰かけると、千絵はすぐにお茶を出した。千絵が淹れたお茶は綺麗な緑色をしている。

「このお茶は、色がいいですね。」

永瀬は、湯呑を口に運ぶと、とてもうれしそうな顔をして、ゆっくりと味わうように飲んでいた。

「玉露茶です。お口に合うよう良かったです。」

千絵は、八女市特産の八女茶の中でも特に高級なお茶を用意していた。特別な来客があるときは、この玉露茶を出すことにしている。隼人は、自分を救ってくれるかもしれない教授におもてなしをしてくれた千絵に対し、感謝の念を覚えていた。そうした思いも束の間に、先ほどもで背負っていたリュックの中から、地図を取り出すとテーブルの上に広げ始めた。

「実は、地図を見ながら色々と調べていたのですが、このトンネル工事現場がある山は、九州山地の中でも北部にあるのですが、さらにその北には耳納連山があります。この耳納連山には、古くから水縄断層があつて今でも大きく動く恐れがある活断層です。今いる場所からはさほど離れていません。大きな断層の近くには、少なからず小さな断層があるので、トンネルの直上にも断層がある可能性があります。」

隼人は、昨日から今日にいたるまでのわずかな時間を使って、インターネットから情報を得ながら頭の中で考察を重ねていたのである。教授と一緒に山に登り、昨日は雨上がりで湿っていると思っていた斜面が、実は僅かな断層から染み出していた地下水だということが分かり、独自の理論を組み立てるに至ったのだった。

「この小さな断層は、もしかしたらトンネルの掘削断面まで伸びていて、工事で掘り進んでいた時にその部分に触れてしまい、変位が起きてきたのかもしれない。」

断層は、単なる地層のずれだけではなくその隙間に脆弱な礫質や粘土が噛み合っている。その脆弱な層は、密に締まっている状態では何ともないが、土塊除去により解放されると膨張したり水分が抜けて沈下することもある。隼人は、それがこの工事現場で起きていると考えたのだった。

「しかし、設計時に掘られたボーリングのデータでは、断層は確認されていないぞ。」

今村は、怪訝そうな表情で若者の考察結果に対して疑問を投げかけた。

「ボーリング・データはわずか五〇ミリメートルほどの径で掘られて得られた情報ですから、小さな断層であれば、分からないこともあると思います。」

確かに、隼人の言うことには一理あった。

「先ほど、永瀬先生と山に登って、地表の湧水の量が減っていることが分かりました。トンネル掘削の進捗に伴って地下水が抜けて行っている可能性があります。」

「祠だと思っていた小さな石積の塔がある場所を地図上で指さすと、トンネル計画線にとっても近いことが分かる。」

「確かに、数日前までは掘削断面からの湧水はなかったが、二日ほど前から掘削面から水が出てきた。よし、先行して水平ボーリングで掘削方向に断層がないか確認してみよう。」

通常、地質調査のためのボーリングは地表から垂直に掘るのであるが、トンネルの場合、掘削前方の土質を確認するために水平方向に行うことがある。ただし、削孔するケーシングの自重により垂れ下がっていくことからさほど長い延長を掘ることはできない。それでも、データが得られることは重要で、やって無駄になることはない。掘り進める先の地質が分かれば、それに対する対策が検討できる。止水するための薬剤注入や、掘削面周辺が沈下するのを抑制する補助工法がいくつかある。これ以上の沈下を起こさなければ、工事は問題なく進められるのである。

「先生、新田の考えはどうですか。」

今村は永瀬の顔を見ながら、確認するように問いかけていた。

「見事な考察だと思いますよ。わたしもその考えに依存はないです。頼もしい若者ですね。」隼人のほうを向くと、嬉しそうな面持ちで見ている。

「けど、一つ気になることがあります。」

どうしたのかという表情で今村と永瀬は、隼人の言葉を待った。

「工事を止めると言って、事務所に来てきた栗原さんです。」

山の中で見つけた取水用のパイプのことを思い出していた。あのパイプは、下の集落まで続いているはずである。永瀬が、山の水量が減っていると聞いたときに、このパイプを流れる水の量も当然少なくなっているはずである。トンネルの掘削が進めば、山の中に蓄えられた水は地下でトンネル方向に流れてしまい、地表では激減する可能性がある。そのことは、どうやっても食い止めることが難しい。

昨日、五センチメートルほどの変位が見つかって、トンネル掘削面が沈下していることが分かった。それと同時に、周辺へも影響が出ているはずである。昨日、突然やってきた栗原は、そのことを伝えるにやってきたに違いない。栗原は、水が枯れたら生活できないということと言いたかったのだろう。数日前まで、普通に使っていた水が突然減ったのであれば、周囲で一番変化が著しいトンネル工事を疑うのは当然のことである。言葉ではつきり言えないため、態度で示したのかもしれない。

「トンネル工事に伴って、地表面の水枯れは起こる可能性が大です。栗原さんだけでなく、集落の人たちの抗議が殺到することは避けられません。」

すると、地質専門の名誉教授は分かっているかのように、笑みを崩さないままその口を開いた。

「それは大丈夫ですよ。トンネル工事で地下水は一時的に抜けてしまうかもしれませんが、け

れど、トンネルは工事の過程で、その周辺がすっかりと止水されるので、工事が終われば自然と地下水は復元していきます。水枯れが起きても、それは一時的なことですよ。」
現場事務所内に安堵の空気が流れた。

「よし、工事期間中の生活水補償について、発注者の役所に相談してみよう。」
今村は、会議の申し入れをするために電話をかけた。これで、自分の置かれた環境がいい方向に向かっていけばいいと、隼人は心の中で考えていた。

千絵は、自分の席から小さな会議テーブルを見つめて、緩んだ表情の隼人を見ると、不思議なことに喜びがこみあげていた。自分は雇われの身であって、この工事に責任があるわけではないが、ここにいる人たちと一緒に、目的に向けて進むことができることに対する喜びと、隼人の人生に少しでも関わることができて嬉しいという思いが、交互に現れていたのである。工事現場は、基本的に関係者以外立ち入り禁止となっていて、外部の者は容易に入ることはできない。工事現場は、現場組織の一員となったものだけが見る世界といっても過言ではない。自分は、貴重な体験をしているのだという思いが、千絵の心を豊かにしているようだった。千絵は、隼人の人生をもう少し覗いてみたい気持ちになっていた。以前、彼女はいるのかと聞いたときに居ないとは言っていたが、本当のところは分からない。それでも、彼と時間を共有できる間は、彼のことを思いながら生活してもいいのではないかとさえ考えていた。工事は、まだ一年以上続くこととなっている。毎日を楽しく過ごしていきたい。ささやかな幸せを噛みしめながら生きて、誰も文句は言わないだろう。地方に暮らす一人の女性の小さな夢であった。

永瀬は、新田に興味を持ち始めていた。最初に山で遭遇し、転んだ姿を見たときは、気弱な青年という印象だった。それが現場に出て少し言葉を交わただけで、自分なりに考察し、自分の考えを述べることに感心していた。

「新田さん、人は何のために生きるのだと思いますか。」

唐突に、永瀬は質問を浴びせていた。若者がどんなことを考えているのか、知りたいという好奇心からだった。

「生きる目標ですか。難しい質問ですね。」

少し考えながら、何かを思いついたように軽く手を打つと若者は話し出した。

「自分が成長するため、でしょうか。社会の一員として、自分が成長することで社会を良くすることができると思えます。そして、自分がやりたいことは我慢せずにやるということも、自分が成長するうえで大切なことだと思います。これって、答えになっただけでしょうか。」
照れ笑いをしながら頭に手をやると、変なことをいってしまったという面持ちで会議テーブルの端を見つめていた。

「なかなか、良い答えですね。」

若者答えて、あまりに模範的で指摘することは何もなく終わった。

「わたしは、明日を生きるために今日を生きていると思っています。人は、人それぞれの人生を送っていて、他人の人生は決して自分のものにするにはできません。考えていることもまちまちで、価値観は皆違う。それを理解したうえで、自分の人生を自分のために生きることが、一番だと思っています。」

少し難しい話をしてしまっているのかもしれないと、隼人の顔を見ながら話を続けることとした。

「わたしが、何百回も猿駈山に登っていると云ったでしょう。あれは、明日も生きていこうという決意をするためです。若いころに教授とやりあったことで、山登りを始めるようになったのですが、最初にあの山に登った時に見た夕陽がとても奇麗でした。その時に、思ったのです。明日はもっと奇麗な夕陽が見られるかもしれない。明日もこの夕陽が見たいから、希望をもって生きていこうと。」

若者は、意外だという表情で永瀬の顔を見ていた。そんな話をきくとは想像もしていなかったというような顔である。

「人は、一人ずつ知を持っています。個性と言えば分かりやすいですね。その集合体が社会であり、世界です。知の結集がなければ、社会は成立しません。だから、一人一人が明日はもっと奇麗な何かが見られると思って生きていけば、そこから素晴らしい知が生まれ、社会は豊かになるはずです。」

隼人は、不思議な話を聞いているような感覚に陥っていた。山で一人の男性に遭遇し、この世に実在する人物ではないかのように感じていた。だが、その人物は目の間に存在していて、人が生きる意味を教えてください。自分は、そこまで考えながら生きてきただろうか。自分が楽しく過ごせばいいという思いは強かったし、自分より楽しそうな人に対しては、うらやましいとさえ思っていた。そして、自分に対して危害を加えようとする人は、できるだけ排除したいとさえも思い、近づかないようにしていた。苦情を言いに来た栗原も、自分の人生をかけて行動している。彼にとつては意味がある行動だった。怖いとか、迷惑だからと言って排除すればいいものではないのかもしれない。その意味を知ると、それに対する対処法が見えてくる。まさにそれが知の結集なのだろう。

いままで、自分の人生を悔いることは一度あった。大学を卒業後、間もなくして別れてしまった彼女。別れたくはなかったが、二人の置かれた環境が許さなかった。それからしばらくは、生きる希望が見いだせなかった。その後は、高校の同級生と付き合うも、惰性のよう感じられて将来の展望にはつながらない気もしていた。工事現場に入ると自然と向き合いつながり、この地でしつかりと生きていく人と向き合うことが大切なのだと分かり、今こうして大学教授から生きる意味を聞かされ、あらためて自分に問うことができるようになった。きちんと正面からすべての人と向き合い、何のために生きるのか考えてみたい。そう考えると、気持ち前向きに変わっていくようだった。

それから数日後、ボーリング調査が始まり、現場が動き出した。水源に関する補償も、役所が前面に出て知元住民との話し合いが始まった。工事はきつとうまくいく。隼人はそう信じていた。だが、相変わらず栗原は、工事を止めると言ってくる。それを止めることは難しいのかもしれない。だが、トンネルは必要だ。いずれトンネルが完成して、トンネルを抜けた先で奇麗な夕陽を見ることが出来るかもしれない。そして、その夕陽を見たものはきつと言っだろう。明日見る夕陽は、もっと奇麗かもしれないと。